

イラン国立博物館所蔵マルヤン出土資料文献調査経過報告¹⁾

森 若 葉

はじめに

2011年にイラン国立博物館と京都大学文学部の間で締結されたMOUに基づいて、現在、日本人研究者チームによってイラン出土楔形文字関連資料の調査が進められている。この調査はテヘランにあるイラン国立博物館所蔵文書の研究・出版を行うもので、本稿はその調査の一部についての経過報告である。この調査は、総合地球環境学研究所の「インダス文明と環境変化」プロジェクト（リーダー：長田俊樹教授）による2007年のイラン遺跡調査の際に、現イラン国立博物館長アクバルザーデ氏²⁾からの打診があったもので、そのプロジェクトメンバーであった前川和也教授（国士舘大学）が検討を始められた。しかしながら、同博物館には楔形文字資料を専門とする研究者がおらず、保管されている楔形文字資料の状態など詳細はわからなかった。そのため、2008年夏に、法政大学教授の松島英子氏が、テヘランに滞在し、粘土板の保存状況など予備調査を行うことになった³⁾。その際、松島氏は、スサ出土を中心とするレンガ資料のコレクションについて調査を行い、シュメール語、アッカド語、エラム語の資料が含まれることを確認した。

この予備調査の報告を受けて、前川教授は、イラン側の意向を考慮し、研究体制作りに入った。イランでの学術調査には研究機関間でMOUを結ぶ必要もあり、2009年に、松島氏、春田晴郎氏（東海大学教授）、森の3名がイランにおいて同館長ミランデシュ氏および碑文部門のアクバルザーデ、ピラン両氏と調査研究計画について話し合いを行った。この際

-
- 1) この研究は、トヨタ財団 アジア隣人プログラム —— アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承「イラン国立博物館所蔵楔形文字文書の保存・活用 —— カタログの作成と3Dデータ化の試み」（代表者：前川和也・国士舘大学・2010.11～2012.10）の助成をうけている。また、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究A（海外学術調査）「イラン国立博物館所蔵粘土板文献の調査・研究」（研究代表者：前川和也・2011年度～2015年度、分担者：井谷鋼造（京都大学）、川瀬豊子（大阪樟蔭女子大学）、寺村裕史（国際日本文化研究センター）、春田晴郎（東海大学）、松島英子（法政大学）、森若葉（総合地球環境学研究所）、および、若手研究（B）「シュメール語動詞接頭辞の形態論的研究 —— 前三千年紀後半～二千年紀前半の資料分析 ——」（研究代表者：森若葉・2009年度～2011年度）の助成を受けている。
 - 2) アクバルザーデ氏はこのとき同博物館碑文部門長で、当時の館長はミランデシュ氏であった。その後アルダカニ氏を経て、2011年にアクバルザーデ氏が館長に就任している。
 - 3) その予備調査の報告は、松島英子2010：15-16にまとめられている。

に、すでに提示されていたレンガ資料のほかに、あらたにマルヤン (Malyan) 遺跡出土の未公開資料についての研究・出版についても打診された。マルヤンの資料はスサ出土資料とは異なり、粘土板資料中心の資料群で、未公開のものが多く含まれる。また、小さなサイズの資料が多く、3D スキャナーを使った3次元データ化に適した資料であると考えられた。3D データは従来、写真か手写に頼らざるをえなかった粘土板資料研究にとって画期的な技術である。検討を重ねた結果、当時、総合地球環境学研究所の研究員で、考古学・文化財科学を専門とする寺村裕史氏にも加わってもらい研究調査をすすめることになった。2010年秋に、トヨタ財団の助成をうけ、テヘランのイラン国立博物館が所蔵するレンガ資料200点余りについて、写真および翻字を付したカタログの出版を行うことになった。また、一部のスキャニングに適した資料にかんし3Dモデリングを試行することになった。2011年3月に井谷教授をはじめ、関係者の尽力により京都大学文学部とイラン国立博物館間で、研究協力にかんするMOUが締結された。その際、マルヤン出土資料についても調査・出版許可が下りたため、2011年度から、レンガ資料とマルヤン出土の資料について並行して本格的に文献調査をすすめることになった。本報告では、2011年に調査が始まったマルヤン出土の文字資料調査について、資料の概要等の報告を行うものである⁴⁾。

I マルヤン遺跡について

マルヤン (Malyan) は、イランのファールス州、シーラーズの北46 km、ペルセポリスから西へ43 kmに位置する遺跡である。マルヤンは、古代の名をアンシャン (Anshan) といい、インダス地域とメソポタミア地域の間に位置する主要都市の1つであった。アンシャンの名は、前3千年紀後半のシュメールやアッカドのテキストにすでにあらわれ、前2千年紀や前1千年紀のエラムの支配者たちは伝統的に「アンシャンとスサの王」を称した。そのうち、アンシャンは初期のアケメネス朝の本拠地となった。このアンシャンの位置は長く不明であったが、1971年に始まったマルヤン遺跡の発掘によりアンシャンであると同定された。

マルヤンは城壁に囲まれた遺構の面積が約200ヘクタールという広大な遺跡で、その発掘は1971年から1978年にかけてペンシルヴァニア大学博物館の後援のもと行われた。発掘された資料の多くは、メソポタミア諸言語に影響を受けたエラム語で書かれ、中エラム王国末期の日付が記されていた。これらの資料は、メソポタミアに隣接するフーゼスターン地域のスサなどの資料に比べ、エラム固有の特徴をより残していると考えられており、エラム語研

4) 調査は、レンガ資料のコレクションとマルヤン出土資料のコレクションを並行して行っている。2011年3月調査：前川・森，同年5月調査：前川・松島・春田・寺村・森，同年8月-9月調査：松島・春田・川瀬・寺村・森（この調査では、田中裕介氏（京都大学大学院），渡邊俊祐氏（同志社大学大学院）も研究協力者として同行した），同年12月調査：前川，春田，森。

究において非常に重要な資料群である。また、楔形文字で記されたエラム語資料のほかに、原エラム文字資料、アッカド語およびシュメール語資料が含まれることがわかっている。

II 出土資料の状況

このマルヤンの資料群は、Stolper がその一部については1980年代すでに出版を行っている。Stolper の楔形文字資料の出版は、1972年から1974年に発掘されたマルヤンの資料のうち、彼が「明確に定義されるもの」として選んだ約114枚である。これは *Texts from Tall-I Malyan* として1984年に出版されている [Stolper 1984]。また、マルヤン出土の原エラム文字テキストの出版として、Stolper 1985があり、このなかに数点の手写コピーがあり、それまでの出版状況がまとめられている。原エラム文字テキストについては、写真や手写での出版が多く文献に分かれているため、後述することにする。

これらの出土資料は、テヘランのイラン国立博物館に収蔵されているが、調査許可が下りた2011年3月当初まったくの未整理の状態であった。そのため、調査にあたり整理・分類の必要があり、現在、カタログ化の準備をすすめている。さらには、発掘、出版から20年以上が経過し、これまでの状況をまとめる必要があった。本稿の主たる目的は、出版に向けた既出版文献の整理と、現在の資料の状態の報告である。イラン国立博物館が所蔵するマルヤン出土資料として、現地点でM3からM1810まで397点の資料の存在を確認している⁵⁾。資料群は他部門で保管されているものなどがあり、碑文部門で一括管理されているわけではないため、今後まだ資料数が増える可能性がある。資料は基本的にマルヤン出土考古資料の通し番号M-という番号が付されている。この番号のほかにも、資料には、博物館の番号であるmf-番号やBK-番号があわせて用いられるものがある。

Stolper 1984によれば、1971年から1978年に出土したそのほかの資料について、多様なものがあり、1984年と同時代のエラム語資料のほかに、中期エラム語が記されたレンガ碑文、土器片、石製品、初期のアッカド語のレンガ碑文、シュメール語の行政経済文書があると序文に記している [Stolper 1984: xi]。Stolperによると、出版した資料は、考古学的に、中期エラム後半の前1300年から前1000年の間のもので、字体から中期エラム時代の末期と推測されるものである。

エラム語は、シュメール語、アッカド語、ヘブライ語資料においてエラムとしてあらわれる、言語系統不詳の膠着語である。南インドのドラヴィダ語族と関連づける議論もあるが、あまり多くの研究者には認められていない。エラム語資料は、現在のイランの西南部、フーゼスターン州とファールス州に分布している。多くは、スサやその周辺のフーゼスターン州

5) 資料番号BK355の粘土板はマルヤン出土の可能性があると博物館側から報告があったが、現在のところM番号が確認されず、内容を確認中であるため、397点のなかに含めていない。

の遺跡、ペルセポリス、アンシャン出土のものである。

エラム語の時期的分類は次の通りである。

古エラム語 (Old Elamite) : 前 2600-前 1500

中期エラム語 (Middle Elamite) : 前 1450-前 1000

新エラム語 (Neo-Elamite) : 前 1000-前 550

帝国エラム語 (Achaemenid Elamite) : 前 550-前 330

古エラム時代は、通例文書はアッカド語で記されていたため、エラム語テキストは少ない。また新エラム語テキストについても初期の前 750 年以前は非常に限られている。これらの楔形文字資料に加え、前 3100 年頃～2700 年頃に用いられた原エラム文字 (Proto-Elamite) による資料がある。この文字は、未解読であるが、エラム語が記されているのではないかと推測されている。

Stolper は当初、1984 年に出版しなかった楔形文字資料についても後に出版の意向であったようだが、その後の出版計画については 30 年近くたった現在も資料を保管しているイラン国立博物館に報告されていない。今回イラン側の許可を得て調査しているのは、マルヤン出土資料で Stolper がこれまでに出版しなかったものである。

調査対象としている未出版資料には、表面採集による資料も含まれ、状態のかなり悪いものも含まれる。しかしながら、Stolper 1984 が、おおよそ中期エラム時代後半の行政経済文書にしばって出版を行っているため⁶⁾、紀元前 2800 年頃からおそらく紀元前一千世紀にかけての、行政経済文書、王碑文など、エラム語を中心にアッカド語、シュメール語の文書が含まれ、非常に重要な資料群であることが知られている。そのほかに、文字のない資料 (印影のみのものなど) もいくつか含まれている。

資料のうち、楔形文字資料については、粘土板の写真と 3D モデルを CD に収めるかたちで、写真・翻字・翻訳・注釈を付した出版を予定している。原エラム文字資料については、いまだ未解読であるため、写真と 3D モデルによる出版を行う予定である。2011 年の調査では、未整理の状態にあった資料の整理・確認作業をピラン氏とともにを行い、メンバーで分担して資料の写真を撮影した。3D モデリングについては、寺村氏を中心に、渡邊氏、ピラン氏が作業を進めている。3D レーザースキャナーを用いた現地でのスキャニング作業は、2011 年 5 月と 8 月の調査の際に 68 点を終え、現在データ処理中である。この一部には、すでに出版されているものも含まれるが、写真や手写コピーより研究資料として有効であるとの判断により、博物館の許諾を得て作業を進めている。

6) Stolper 1984 の粘土板の内容については、No. 1～No. 99 までが行政経済文書、No. 100～No. 102 が王碑文である。さらに No. 103～No. 114 がその他 (miscellany) としてまとめられているが、これらは行政経済文書の断片であると思われる。

Ⅲ 資料の分類

Stolper は予備報告書で、マルヤン出土資料を次の5つのカテゴリーに分類している：(1) Baneš deposit (ABC および TUV) 出土の原エラム文字資料、(2) Kaftari trash deposit (ABC) 出土の粘土板断片、(3) 中期エラムの建物から見つかったエラム語粘土板、(4) レンガ資料断片、(5) その他の文字資料断片 [Stolper 1976: 89]。

本調査では、マルヤンの資料番号ごとに、カタログ化にむけ、発掘報告書等と照合しながら、整理を行っている。現在、整理している項目は下記の通りである。

- ・素材（粘土、石、骨など）
- ・形状（粘土板、レンガ、容器片など）
- ・サイズ
- ・資料時期
- ・出土遺跡・場所
- ・資料の状態
- ・面（表・裏・側面など）
- ・言語・文字（エラム語、シュメール語、アッカド語、原エラム文字）
- ・その他の内容に関する情報（王名や神名など）
- ・資料のジャンル（行政経済文書、王碑文等）
- ・ほかの資料番号（BK, mf など）
- ・出版情報（Stolper 1984 その他の既出版情報について）

楔形文字、原エラム文字が記された文字資料のほか、印影だけのものや文字や意匠がない資料⁷⁾もわずかに含まれている。形状としては多くが粘土板もしくはその断片である。粘土板について多い資料が、碑文が刻まれたレンガ片で、Stolper (1976: 96) によると 85 点あり、これらはほとんど表面もしくは表面近くで採集されたものである。

行政経済文書の粘土板は、横長で小さいものが多い。タテの長さや厚みの差が少ないため、板状というよりは細長で丸みを帯びコロコロした印象である。Stolper (1984: 16) は、4 センチから 7 センチの葉巻形であると記述している。残念ながら資料のほとんど断片であるが、完全なもののサイズを測ると、M732 のばあい、2.0 cm x 3.7 cm x 1.6 cm である。これは Stolper (1984: No. 54) によって出版されており、彼の手写コピー（次頁図）で確認されるように、8 行記されている。左から右に 1 行ずつ順に下の行へ表面から下方に回転しながら読むものである。

また、調査中の資料で完全な形である資料は M1464 (2.4 cm x 4.5 cm x 1.2 cm)、M1484

7) 文字も印影もない資料は、M1569-1572 と M1578 の 4 枚で 5.6 cm x 4 cm 足らずで厚みが 2~3 cm の丸みを帯びた長方形の粘土製資料である。

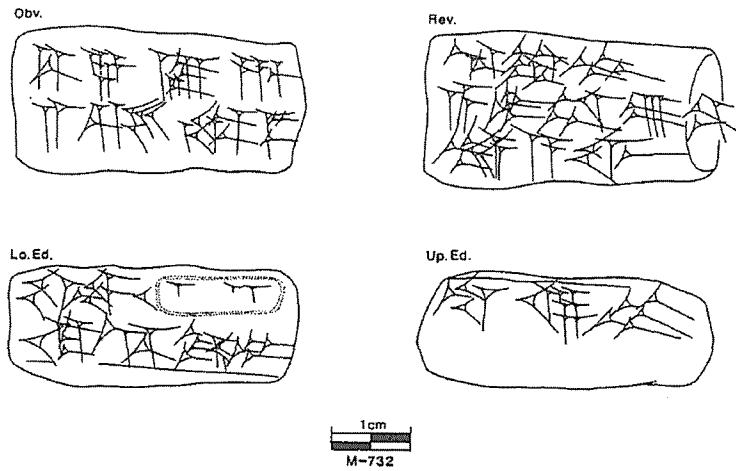


図1 マルヤン出土エラム語行政経済文書資料 M732 (Stolper 1984: No. 54 より)

(3.3 cm x 5.6 cm x 1.6 cm) であり、ほかの断片からもこのような形状が多いと考えられるが、ほかに少し大きな横長の長方形で板状の資料がある。このタイプの資料としては、Stolper 1984 で出版されている、M788 (No. 86, 8 x 12 cm の断片)、M789 (No. 84, 10 x 7 cm の断片) などの、横長の長方形の行政経済文書がある。未出版である M913 は割れて複数の断片にわかれているが、やはり大きな粘土板である。内容の分析はまだ端緒についたばかりであるが、行政経済文書が中心で一部王碑文などが含まれている⁸⁾。

原エラム文字の粘土板には、M625-628, M632, M634, M1000-1008, M1152-56, M1469, M1473-1481, M1505, M1626 の 32 枚が確認されている。これらは横長の平たい粘土板である (Stolper 1976: 89-90 では、長方形もしくは枕形と記述されている)。これらは、紀元前 2800 年ごろの Middle Banesh 期の層からの出土である⁹⁾。Stolper (1985: 4) の Table 1 に一覧リストがあげられており、それまでの出版状況が記されている。

現在出版が確認できたものは下記の通りである。

表1 マルヤン出土原エラム文字資料一覧

番号	既出版情報
M625:	Stolper 1985: 4 (Table 1)
M626:	Stolper 1985: 4 (Table 1), 8, 10
M627:	Stolper 1985: 4 (Table 1)
M628:	Stolper 1985: 6 (Fig. 2, upper left [handcopy])

8) Stolper 1976: 90 によると、M129 はシュメール語資料、M498 と M924 は学校テキストとあるが、M129 および M498 は 2011 年現在博物館では資料の所蔵が確認できていない。

9) M625-628, M632, M634, M1000-1005, M1007-1008 は ABC から、それ以外の M1006, M1152-1156, M1469, M1473-1481, M1505, M1626 は TUV からの出土である [Stolper 1985: 3-4]。

- idem 1985: 3-5, 4 (Table1), 8, 10
- M632: Sumner 2003, pl. IIIe [photo]; Stolper 1985: 6 (Fig. 2, right [handcopy]);
Stolper 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 8, 10-11
- M634: Stolper 1985: 4 (Table 1)
- M1000: Sumner 2003: Pl. 21e, mfl685 [photo] (=idem 1976: Pl. IIIh [photo]);
Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10, idem 1976: 90.
- M1001: Stolper 1985: 6 (Fig. 2, Lowerleft [handcopy]), idem 1976: 89ff, photo 1;
idem 1976: 89; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10-11.
- M1002: Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1976: 89; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10-11
- M1003: Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1976: 89; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10-11
- M1004: Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1976: 89; idem 1985: 4 (Table 1), 5, 10-11
- M1005: Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1976: 90
- M1006: Stolper 1976: 89ff, photo 2; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 6
- M1007: Stolper 1976: 89ff, photo 1; idem 1976: 90
- M1008: Stolper 1985: 4 (Table1)
- M1152: Sumner 2003, pl. IIIe [photo]; Stolper 1985: 8 (Fig. 4, above [handcopy]);
Stolper 1976: 89ff, photo 2; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10-11; idem 1976: 89ff
- M1153: Stolper 1976: 89ff, photo 2; idem 1976: 90; idem 1985: 3, 5, 10-11
- M1154: Stolper 1976: 89ff, photo 2; idem 1985: 3, 4 (Table 1), 5
- M1155: Sumner 2003, pl. IIIId [photo]; Stolper 1976: 89ff, photo 2; Stolper 1985: 7
(Fig. 3 [handcopy]); idem 1985: 3, 4 (Table1), 5, 9-11; idem 1976: 90 ほか。
- M1156: Stolper 1976: 89ff, photo 2; idem 1976: 90; idem 1985: 3, 5, 10-11
- M1469: Stolper 1985: 8 [handcopy]; idem 1985: 3, 10-11
- M1473: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1), 5, 10-11
- M1474: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1), 11
- M1475: Stolper 1985: 3, idem 1985: 4 (Table 1),
- M1476: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1), 5; idem 1985: 4 (Table1)
- M1477: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1)
- M1478: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1)
- M1479: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1)
- M1480: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1)
- M1481: Stolper 1985: 3, 4 (Table 1), 10-11
- M1505: Stolper 1985: 4 (Table 1)
- M1626: Stolper 1985: 4 (Table 1)

ただし、このうち4点、M626 と、M628, M634, M1008 は、現段階でイラン国立博物館では所蔵が未確認である。また、M627 は、Stolper 1985: 4 (Table 1) に原エラム文字資料としてあげられているが、資料の状態が悪く文字を確認できなかった。また、M1005 はサインの確認が難しいものである¹⁰⁾。

10) M1000-1005, M1007 の Stolper 1976: 89ff, photo 1 および M1006 と M1152-56 の Stolper 1976, 89ff, photo 2 については、筆者は現段階でその箇所の資料が手元になく、写真を確認できていない。

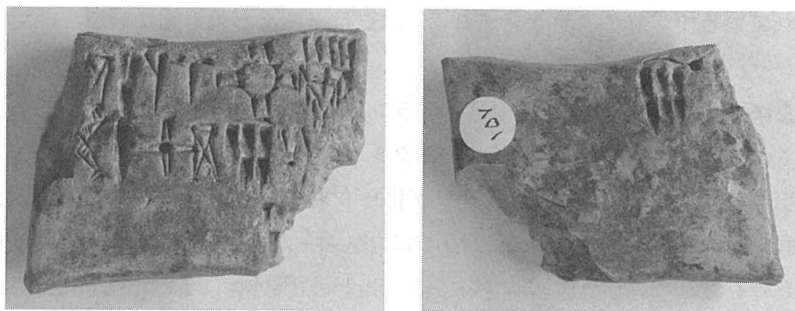


図2 マルヤン出土原エラム文字資料 M1000 (mfl685) (筆者撮影)

図2のM1000は、Sumner (2003)のPl. 21eでmfl685としてすでに収録されているものであるが、サイズは4.3 cm x 5.5 cm x 1.6 cmで、左が表面の写真、右が左右返した裏面である。これら原エラム文字資料については、基本的にすべての資料を3Dデータでの出版する方向で検討中である。

レンガ資料は、すべて断片で、6~8 cm角のものが多い。現在のところ、出版が確認されていないが、Stolper (1976: 96)によると、Huteludus-insusnakによるアンシヤンの神殿の建造碑文の断片と考えられるものが大半である¹¹⁾。サイズが大きいものとしては、上下が多少欠けているが、18行確認できる縦長のレンガ資料M920 (18.9 cm x 14.2 cm x 6.1 cm) や横長レンガ資料右側部分で大きな文字が2行確認されるM1456 (8.5 cm x 18.0 cm x 8.2 cm) などがある。2面に文字が記されたコーナブリック (M692, M919, M1169) も含まれている¹²⁾。

粘土製資料で粘土板とレンガ以外の形状のものとしては、次のようなものがある。M252, M351は、円錐形資料 (cone) の断片であるとみられる¹³⁾。さらにスタンプ印章が押された封泥の一部 (M593, M636)¹⁴⁾、円筒形資料 (cylinder) の断片 (M906, M1482)¹⁵⁾、土器片 (M235, M236, M1460)¹⁶⁾がある。

粘土以外の素材の文字資料としては、骨や石のものがある。石製のものは、下部に5行が刻まれたアラバスター製資料 (M172)、緑色の石片 (M584)、石製容器片 (M242) の資料

11) ただし、M4, M170, M503, M693, M1211, M1225は、アッカド語記述がみられ、あきらかに内容が、Huteludus-insusnakによるアンシヤンの神殿建造碑文とは異なると考えられる [Stolper 1976: 96]。

12) M4とM503の資料については、Stolper 1976: 96にアッカド語レンガ資料断片と記載があるが、所蔵が確認できていない。M258, M312, M647はStolper 1976: 96にレンガ資料断片と記載があるが、所蔵は現段階で未確認である。

13) M351は所蔵が未確認。

14) M593は、カーターのマルヤン発掘報告書 [Carter 1996] に手写がある。

15) M906はStolper 1984においてNo. 105として出版されている。

16) 印影のある土器片M591は、カーターの発掘報告書 [Carter 1996] に手写がある。ただし、M235とM236は、Stolper 1976にコメントがあるが、所蔵が確認できていない。

が報告されている¹⁷⁾。骨の資料が含まれる M555 は、粘土と骨の細かい断片群で文字は確認できなかった。

所蔵調査は碑文部門の資料保管責任者のピラン氏と協力して行っているが、彼女の赴任以前に収蔵された資料であり、博物館の他のセクションに紛れてしまっているものもあるようである。現在、マルヤン出土資料のカタログ化をすすめているが、すでに指摘したように、遺跡発掘直後の予備調査である Stolper 1976 にコメントがあるが、現段階で所蔵が確認されていないものもある¹⁸⁾。写真撮影については、Stolper 1984 等による出版が確認されているもの、および非常に細かい断片群や表面の磨耗が激しいものなど、状態の悪いものについては現在のところ行っていない¹⁹⁾。これらの資料の研究・出版については、今後検討の予定である。

お わ り に

イラン国立博物館での調査は現在1年目であり、今後4カ年継続の予定である。テヘラン所蔵のレンガ資料についてのカタログと、うち数点の3Dモデルについては、2012年末に出版の予定である。その後、レンガ資料の研究と本稿で報告したマルヤン出土の未出版資料の総合的な出版は2015年に予定されている。

イランと日本の共同研究、楔形文字のあらたな出版プロジェクトが立ち上がったことはたいへん意義深い。開始1年足らずのプロジェクトの経過報告であり、不備も多い報告内容となっていることをお許しいただければ幸いである。イランとの共同研究プロジェクトとして4年後に、総合的な出版ができるよう準備をすすめていきたいと考えている。

17) ただし、M242, M584 は、Stolper 1976 にコメントがあるが所蔵の確認はできていない。

18) 以下に一覧をあげておく：M4, M503 (アッカド語レンガ断片 [Stolper 1976: 96]), M129 (シュメール語資料 [Stolper 1976]), M235, M236 (土器片 [Stolper 1976: 97]), M242 (石製容器片 [Stolper 1976]), M258, M312, M647 (レンガ断片 [Stolper 1976: 96]), M351 (円錐形資料片 [Stolper 1976: 97]), M498 (学校テキスト [Stolper 1976]), M584 (石片 [Stolper 1976: 96]), M603 [Stolper 1976], M626, M628, M634, M1008 (原エラム文字資料), M1222 (印影 [Stolper 1976: 97])。これらの資料については、2012年度に、再度、博物館で所蔵を確認する予定であるが、博物館の碑文部門には4000点以上の楔形文字資料が収蔵されている。その多くは整理されているとは言い難い状態にあり、そのなかには出土が不明の資料も含まれているため、同定には難航が予想される。

19) 状態がよくないため、現段階で未撮影のマルヤン資料は次の通りである：M555, M627, M707, M923, M926, M978, M985, M986, M992, M1005, M1020, M1023, M1024, M1120, M1122, M1125, M1126, M1128, M1129, M1133, M1134, M1135, M1136, M1137, M1139, M1140, M1141, M1142, M1143, M1144, M1145, M1146, M1148, M1150, M1151, M1159, M1162, M1163, M1164, M1165, M1166, M1168, M1447, M1585, M1590, M1591。さらに、M520については、2011年12月の調査後にイラン国立博物館から所蔵確認の報告があったもので、筆者はまだ資料を確認していない。

参考文献

- Carter, E. (1996) *Excavations at Anshan (Tal-e Malyan) : the Middle Elamite Period* : Philadelphia : University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania. University Museum Monograph <BA00718588> 82. Malyan Excavation Reports. Vol. 2.
- Grillot-Susini, F. (2008) *L'Élamite. Éléments de Grammaire*. Paul Geuthner. Paris.
- Hansman, J. (1972) Elamites, Achaemenians and Anshan. *Iran* 10.
- Reiner, E. (1974) Tall-I Malyān, Epigraphic Finds, 1971-72. *Iran* 12.
- Stolper, M. W. (1976) Preliminary Report on Texts from Tal-e Malyan, Iran, 1971-1974, *Proceedings of the Fourth Annual Symposium on Archaeological Research in Iran*, Tehran. 89-100pp.
- Stolper, M. W. (1984) *Texts from Tall-i Malyan*. Vol. 1. Distributed by the Babylonian Fund of the University Museum. (Occasional Publications of the Babylonian Fund. 6).
- Stolper, M. W. (1985) Proto-Elamite Texts from Tal-i Malyan. *Kadmos* 24(1) : 1-12.
- Stolper, M. W. (1990) Elamite Fragments from Tchogha Pahn East and related Fragments. *Contribution à l'histoire de l'Iran : mélanges offerts à Jean Perrot*. Textes réunis par François Vallat — Éditions recherche sur les civilisations, 151-161pp.
- Stolper, M. W. (2008) Elamite. In Woodard, Roger, D. (ed.) *The Ancient Languages of Mesopotamia, Egypt, and Aksum*. p. 60-95.
- Sumner, M. W. (1974). Excavations at Tall-I Malyan (Anshan) 1971-72. *Iran* 12 : 155-180.
- Sumner, M. W. (1976). Excavations at Tall-I Malyan (Anshan) 1974. *Iran* 14 : 103-115.
- Sumner, M. W. (2003). *Early Urban Life in the Land of Anshan : Excavations at Tal-e Malyan in the Highlands of Iran*. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology (University Museum Monograph 117. Malyan Excavation Reports. Vol. 3).
- 松島英子 (2010) 「イラン国立博物館 (テヘラン)」の楔形文字資料調査について」前川和也編「セム系部族社会の形成」『計画研究「シュメール文字文明」の成立と展開」平成17～21年度研究成果報告』.

(総合地球環境学研究所)